

耐震工学委員会の現況報告

耐震工学委員会が学会内の一委員会として設置されたのは昭和 30 年 11 月である。その目的は耐震工学研究を行つている個々の研究者、技術者間の連絡が現状では密でないうらみがあるので、その間の連絡をはかり、耐震工学の推進をはかろうとするものである。委員は委員長沼田政矩氏以下 21 名で主として各方面の情報をうるに便なる地位にある会員が委嘱されている。現在までに委員会 22 回を開催した。委員会では目下は主として世界地震工学会議の準備について協議されているが、随時研究者の研究発表も行われている。また本委員会主催の行事として毎年 1 回、地震工学研究発表会を開催しており、昭和 32 年以来すでに 2 回開いたが、両回とも地震学や建築構造学の権威者による特別講演、会員の研究発表があり討議も活発で、その結果はすでに 2 冊の前刷論文集として学会より発刊されている。本年 9 月に第 3 回を行う予定で、この会の発展は本委員会の最も力を入れていることの一つである。また科学技術庁資源調査会が推進している強震計設置計画に協力する意味で、土木学会からも各方面に強震計設置を呼びかけることを定めたが、その効果は逐次あらわれはじめ、すでに国内の港湾施設、ダム等で地震測定を行つているものがかなりあるような情勢となつている。本委員会としては今後も努力を続け、耐震工学の基礎的資料を集めることに貢献するつもりである。この機会に現在当面している世界地震工学会議について準備の現況を報告しようと思う。1956 年米国において米国地震工学研究所主催で、万国地震工学会議が開かれ、日本からも地震、建築、土木関係者が多数出席して研究連絡に、懇談に、予想以上の成果をあげ、必然的結果として次回の会合が要望され、その主権を日本でとの声が高かつた。よつて同年末頃 1960 年に次期会議を東京で開催するとの方針を定め、土木、建築両学会の諒解も得て学術会議第 5 部内に地震工学懇談会を設けその準備を始め、引きつづきその具体的準備機関として、万国地震工学準備委員会を学術会議の外に作り、土木、建築、地震 3 学会より委員を送つて準備を進めた。1958 年 9 月、閣議は 1960 年に学術会議主催による世界地震工学会議を開くことを決定し、ここに学術会議内に同会議組織委員会が設置された。委員は東大教授 武藤 清委員長ほか 41 名、うち土木学会の推薦は 13 名である(43 卷 11 号 学会記事参照、記事掲載後、大学関係に平井教授を追加)。組織委員会には、若干名の 常任委員

があり、これに新たに委員長より委嘱される実行委員を加えて常任分科会をもち、これが会議開催に関する一切の準備にあたつている。

論文募集は国外、国内に呼びかけることとし、外国には米国はじめ地震に関係ある多数の国に会議開催を通知し論文募集を行つている。イタリー、イギリス、中国等からはすでに個人的反響がきているが、ことにアメリカは本会議に協力するため組織を作り積極的に協力をされている。応募論文ははつきりつかみにくい、当日議場で読まれるものも、時間の関係で読まれないものも、ともに会議提出論文として議事録にのせることになつている。議場での発表は日本語または英語とし、議事録登載論文は英文となる予定である。

土木学会は地震学会、建築学会とともに最初から常に多数の委員を送つて本計画に協力しており、耐震工学委員会はその母体となつている。組織委員会が論文を募集する場合も、土木関係論文は土木学会にその選衡を委任することになるので、本委員会としては立派な論文が選出されるような選定方策を審議したが、その結果まづ会員から論文を公募して、これに応じて提出された論文を本委員会で審議し、世界地震工学会議に提出するに適したものを選定し、これを組織委員会に推薦することにした。このため学術会議としての論文内容梗概提出期限は 6 月 30 日となつているが、土木工学関係論文については 4 月 30 日とし提出先も本会耐震工学委員会と定められている。なお個人研究とは別に、日本の耐震土木技術を世界に紹介する意味で、総合論文を準備することとし、これについては土質および基礎工(土質工学会)、設計震度の問題(耐震工学委員会)、港湾構造(運輸省)、橋梁(土木学会橋梁構造委員会)、ダム(国際大ダム会議日本国内委員会)、上下水道(水道協会)の 6 編をそれぞれカッコ内に記した団体に論文作製を依頼した。

(なお本会議ならびに論文募集については、お知らせ欄に公告されているので参照されたい)

以上に耐震工学委員会の現況と、世界地震工学会議の準備状況、等について説明したが、本委員会が委員のみの委員会となることなく、会員全部の関心と協力をうる事が委員一同の最も望んでいるところであり、本会对する御協力と御忠言とを願つてやまない次第である。

(岡本委員 記)

委員長	沼田 政矩		
委員	秋草 勲	石井 靖丸	猪瀬 寧雄
	岡本 舜三	神谷 貞吉	小西 一郎
	田原 保二	寺島 重雄	友永 和夫
	野瀬 正儀	畠山 正	比田 正
	平井 敦	星埜 和	松尾 春雄
	水越 達雄	村 幸雄	最上 武雄
幹事	久保慶三郎	高田 孝信	

プレストレスト コンクリート

Y.ギヨン 著 共立出版 刊

著者は現在国際プレストレッシング協会の副会長をつとめるPCに関する世界的大家であり、この原著は英訳され世界的に有名である。1951年に初版が出版され、1953年に第2版が出版された。PCのその後の進歩発展があまりにも急激であつたため、今日では内容的に一抹の物足りなさを感じさせるところがあり、すでに古典的といえるほどの部分もある。特に最近発展しているPC不静定構造物関係について全くふれていないのは残念である（もつとも本年当初第2巻が不静定PC構造だけを取扱つて出版された）。PCの施工法に関してはほとんど取扱われておらず、現場技術者には不満を感じる向きもあると思われる。

しかしPCの基本的概念を正しく把握し、各種構造物にPCを正しく応用するための基礎を知るためには非常に適当な著書であつて、耐火性、定着部応力、付着などに関する一連の基礎問題については、現在でも群書をぬいている。

本書に取扱われる事項は、第1部において、プレストレッシングの際の摩擦の問題、端定着部付近の応力度、耐火性、プレテンションの付着応力分布、等、基本事項である。第2部では静定部材断面の断面設計法を取扱っている。第3部では静定ハリについての試験結果、安全度、等について述べている。この部分は試験方法、整理方法、など詳細に記述されており、研究者にとつてはよ

い指針となる。せん断破壊については第2、第3、両部に記述されているが、その後の研究成果があまりにもめざましいので、ほとんど参考とはならない。

以上要するに本書はPCの基礎を理解するためには非常に役立つところが多いが、現場設計者、施工者、等にとつて、この書を読んだだけで、ただちにPC構造物の設計施工の全般がわかるというわけにはゆかないと思われる点が遺憾である。

監修：正員 藤田亀太郎（極東鋼弦コンクリート振興KK社長、翻訳：大野久次（関東地建営繕部建築第二課長・工博）、中野清司（建設省建築研究所研究員）、B5判 598ページ、上製箱入、定価2500円、昭33.11.5.発行。

設計技術に志す人に最適な内容!!

古川一郎著 【最新刊】

橋 梁 工 学

[A5判・384頁・函入・¥600・〒50円]

総論、荷重、単純桁の応力、リベット接合、溶接合、プレートガーダー橋、合成桁、単純トラス橋の構造など。新示方書に完全に準拠して、特に実際応用の面を詳述した。各章末に演習問題を設け、なお設計実例を示して詳しく解説している。

日大教授 工博 小野竹之助著 【図書館協会選定】

コンクリート工学 材料篇

コンクリートの標準示方書の改訂に準拠し、旧版を増補改訂し、内容を一新した。好評3版発売中

[A5・P. 494・定価680円・〒50円]

日大教授 工博 小野竹之助著 【図書館協会選定】

コンクリート工学 施工篇

新示方書に基づいて、最も新しい合理的なコンクリートの施工方法を逐一詳述した好著。新刊

[A5・P. 400・定価600円・〒50円]

好評各重版出来

杉本礼三著 (各8版)

応用力学演習 上・下

A5・各P280・価各700円

理博 小貫義男著 (5版)

土 木 地 質

A5・P384・価550円

工博 河上房義著 (6版)

土 質 力 学

A5・P296・価480円

工博 河上房義著 (3版)

土 質 工 学 計 算 法

A5・P232・価350円

工博 横井増治著 (3版)

土 木 施 工 法

A5・P280・価480円

工博 本間仁他著 (5版)

水 理 学 入 門

A5・P168・価220円

工博 岩崎富久・田中寅男著 (再版)

衛 生 工 学

A5・P424・価800円

森北出版株式会社

東京都千代田区神田小川町3の10
振替東京34757 電(29)2616・4510・3068